

3号墓(第33～38図、PL.37～45、写真31～40)

(1)立地・規模・墳形

概要 C1・2、D1・2グリッド、標高72.3mの尾根部に位置する。南北に連なる墳墓4基のうち、北から三番目に立地し、区画溝を接し北側に2号墓、南側に4号墓が位置する。区画溝重複箇所における土層堆積の所見では3号墓は2号墓、4号墓に先行し、このたび検出した墳墓4基のうちでは最初の築造と判断した(第34・35図A-A'セクション、第14図A-A'セクション等)。

溝により区画された墳丘の平面形は、四隅突出型と考えられる。ただ、墳丘及び区画溝の遺存状態は非常に悪く、突出部のラインが貼石と共にある程度確認できるのは北西隅のみである。攪乱、流失などにより南西隅、南東隅は墳裾付近のみ残存し、平面形が辛うじて窺えるに過ぎない。とりわけ北東隅は竹の繁茂により攪乱が著しく、墳丘、貼石共に全く遺存していなかった。このように3号墓の突出部は、原形をほとんどとどめていないため、形態等、特徴の詳細な検討は困難である。墳丘の規模は、突出部を含めない場合、南北軸が6.0m、東西軸が7.5mと東西軸がやや長いものの概ね方形を呈する。

確実に盛土と判断できる堆積は無く、表土(I層)、II層を除去すると墳丘中央付近はクロボクのIII層が残るが、区画溝周辺に至るとIV層以下の基盤層が露出する状況である。墳丘高は、最も比高差の大きい区画溝西辺の底と墳頂との計測で0.68mである。

北西隅 3号墓墳丘の北西隅近辺は、平成22年度確認調査におけるトレンチ(Tr.4)調査範囲に重複していた(第34・35図A-A'セクション)。当該箇所は複数の遺構が重複しており、やや複雑な状況を呈している状況で、3号墓区画溝に掘りこまれる堆積を確認した(第35図5～7層)。当該箇所から西側を精査した結果、突出部へと北西方向へ延びる区画溝北辺とは異なる、南西方向へと延びる掘方を確認した。そこでサブトレンチを設定し(第35図F-F'セクション)堆積状況の確認を行ったところ、区画溝に先行する浅い落ち込みが認められた(第35図1～4層)。この落ち込みが区画溝西辺周辺でどのように展開するのかわ不明である。このように、3号墓区画溝北辺に先行して掘削された何らかの遺構が存在したことを想定することができる。

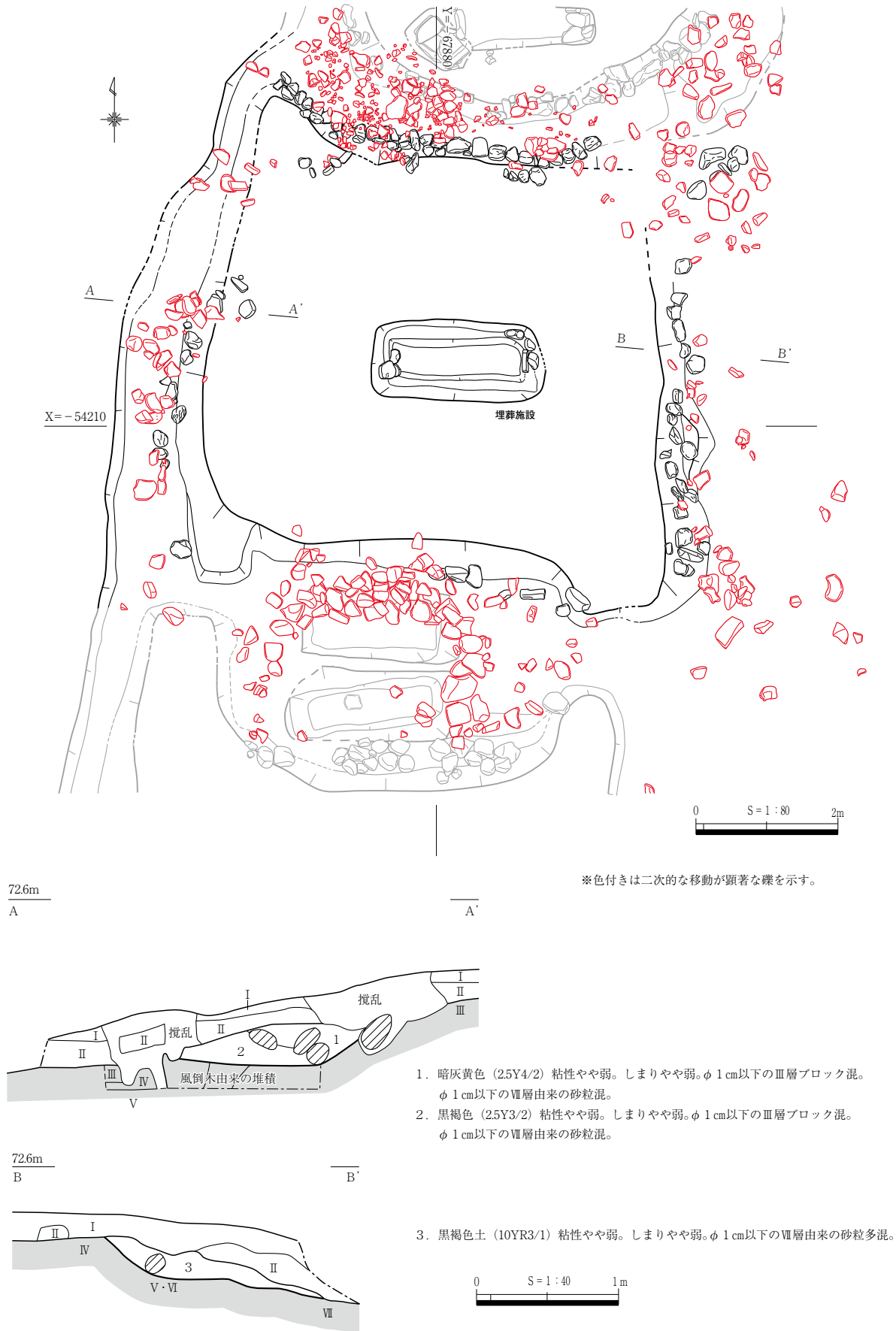
この落ち込みは、突出部構築以前の区画溝掘方の可能性がある。この落ち込みの墳丘側の掘方が区画溝北辺における墳丘側のラインと概ね連続すること、貼石と同じ河原石が3点掘方に沿うようにして並ぶこと(第35図、写真31・32)がその根拠として挙げられる。すなわち、どの程度の期間を経たかは不明だが、突出部の構築を後に実施したという可能性がある。遺存状況が不良で確認できない箇所



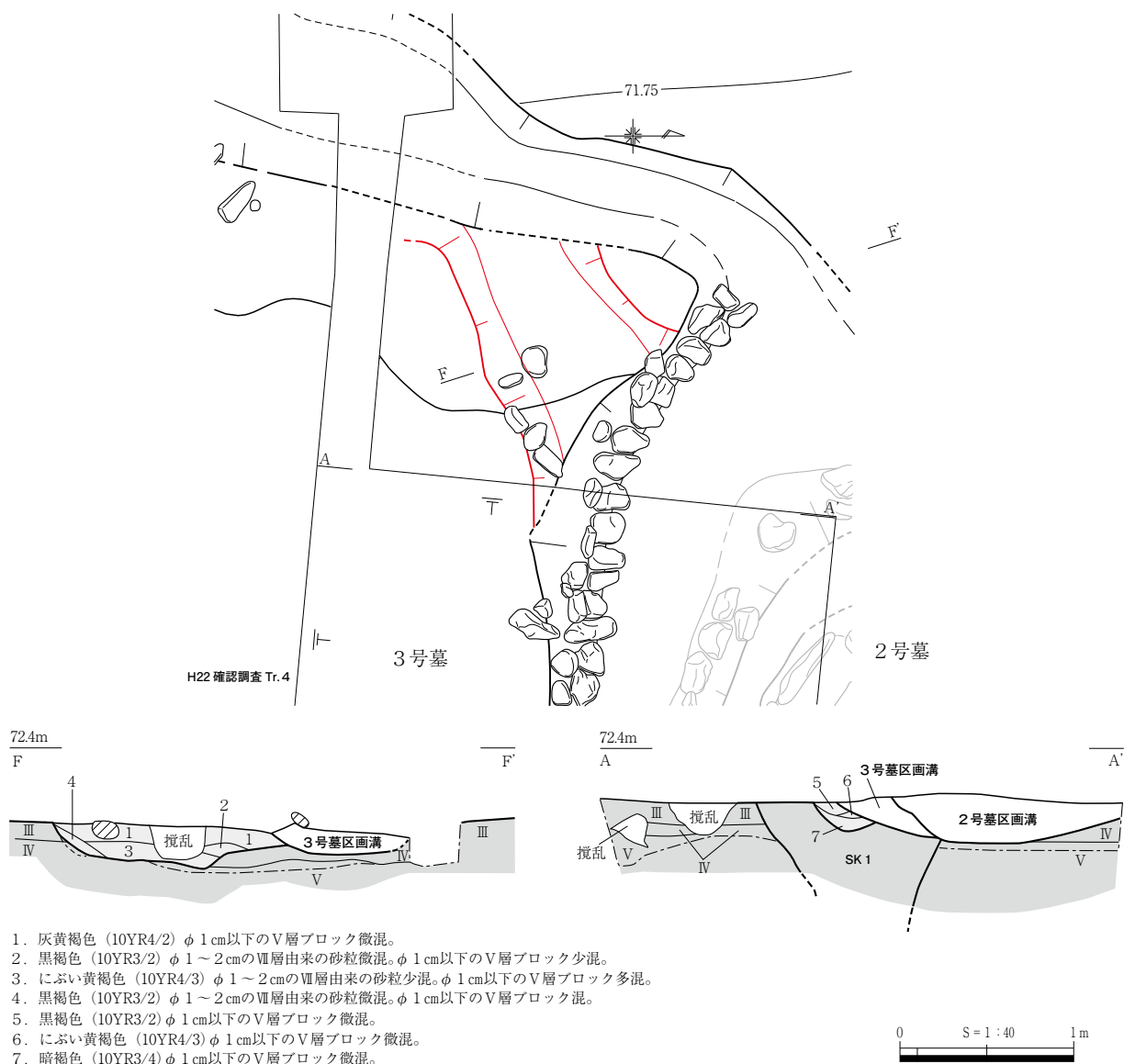
写真31 3号墓北西隅(東から)



写真32 3号墓北西隅(南から)



第33図 3号墓礫検出状況



第35図 3号墓北西隅

もあるが、他の突出部では同様な痕跡は確認されていない。

(2) 区画溝

既に述べたとおり、北辺及び南辺はそれぞれ2号墓、4号墓の区画溝に掘り込まれるため詳細は不明である。墳裾における検出面からの深さは、北辺で0.1～0.22m、南辺で0.05m～0.15m程度に過ぎない。東辺は斜面側の肩が認められず、流失した可能性がある。墳裾での深さは0.16m～0.27mである。西辺は幅が0.6～1.2m、検出面からの深さは0.1～0.2m程度となる。

溝底の標高について、西辺と東辺における南端、北端の高低差は概ね10cm以内と顕著ではない。北辺と南辺では、墳裾の数値で25～30cm程の高低差があり、いずれも東から西へ緩やかに下降する。

溝掘方の肩は遺存状況を反映し、全般に不明瞭である。埋土の色調は黒褐色、灰黄褐色などであるが、盛土由来と評価できる堆積は認められない。溝中及びその外側には、全辺において多数の転落石が確認された。土器等の遺物は西辺を中心に転落石と共に少数ながら出土した。

(3) 貼石

概要 築造時には墳丘斜面全辺に設置されたと考えられるが、検出を行うと転落等二次的な移動が

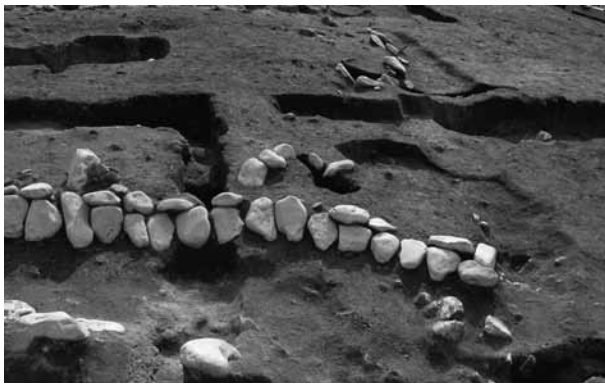


写真33 3号墓北辺(西半部：北から)



写真34 3号墓北辺(中央：北から)



写真35 3号墓北辺(東半部：北から)



写真36 3号墓北辺貼石二段目(北西から)

顯著で、遺存状況は不良である。比較的残りの良い北辺、東辺においても墳裾付近の石組が確認できるに過ぎない。原位置を維持しているもの、二次的な移動を経ているがその程度が比較的小さいものを第34図に示した。貼石の裏込め土はにおい黄褐色、黒褐色を呈し、区画溝埋土との比較において明瞭な差異はない。以下、各辺ごとに概要を述べる。

北 辺 本墳墓においては最も遺存状況が良好で、墳裾における一段目の大半が残存する。一段目は、石の長軸を縦向きにし、墳丘斜面に概ね沿う角度で隙間少なく配する。石の大きさは長軸で0.4m前後、短軸0.2m前後を測り、他の墳墓と同様である。遺存する石組列の東端、西端は、外方へ向け緩やかな曲線を描き、突出部の存在を示す。西側は突出部の先端まで貼石の設置が確認できるが、西辺に至ると貼石が遺存しておらず、様相が不明となる。

二段目は本辺西寄りを中心に確認し、一段目よりも小振りな石で構成される。その多くは石の小口を外方に向けた状態で検出された。このような、石材の平面が上を向いた状況は据え方に起因するものではなく、墳丘を土壌化や流出で失ったことにより倒れた可能性を考える(写真36)。二段目を構成する石は、いずれも土壌化が顕著なⅡ層中での検出で、明瞭に裏込めを伴うものが無いことも根拠として指摘できよう。

東 辺 樹木根の攪乱等により北東隅、南東隅の突出部近辺はいずれも欠落するが、一段目の貼石が若干残存する。欠落した石は東側の斜面へ転落したと考えられ、墳裾に据えられた石のいくつかは溝中に倒れた状態で検出されている(第34図、写真37)。石の大きさは北辺と同様に長軸0.4m前後のものが主体で、基本的に長軸を縦向きにするが、大きさにより横長にも設置する。

南 辺 4号墓の項で詳述するが、本辺は四隅突出型を呈する4号墓の区画溝北辺と重複しており、当該箇所において多数の転落石を確認した。

多くが4号墓区画溝埋土中から出土したが、検出位置から、3号墓南辺の貼石が多数含まれていると想定できる(第33図)。墳丘斜面から転落した状況をよく示すものもいくつか確認できる(写真39)。このように原位置を概ね維持する貼石は非常に少なく、設置手法の詳細は明らかでないが(第34図、写真38)、他辺と比較して大きな差異は窺えない。

西 辺 原位置を保つ石は無く、欠落箇所が目立つ。遺存する石の大きさは、長軸0.3m程度のものが多数を占める。第34図、写真40で示した石は、二次的な移動の度合いが比較的少ないものである。したがって、石の設置手法などは判然としない。また、溝中等で確認した転落石の数が他辺と比較し少ないことが特徴で、当初からの貼石が少なかった可能性もある(第33図)。

(4) 埋葬施設(第36図、PL.43・44)

3号墓において、検出された埋葬施設は1基である。墳丘のほぼ中央に、木棺を納めた墓壙が位置する。墓壙の長軸は東西方向を採る。Ⅱ層下のⅢ層において検出し、墓壙の規模は、長軸2.46m、短軸1.13m、検出面からの深さは0.54mである。

墓壙内における土層堆積の所見により、木棺の痕跡が窺える。墓壙短軸の土層断面(A-A'セクション)では、4・8・15・16・18層と31～34・36・38・39層との境界が直線的なラインで検出され、前者が棺内、後者が棺裏込を示すと判断した。墓壙長軸の土層断面(B-B'セクション)においては、12・13・17層と28・30層の境界が同様に木棺と棺裏込土との境界を示すと考えられる。棺裏込土は、基盤層であるV層由来のブロックを多く含み、棺内流入土との判別が可能である。

墓壙底面は浅い二段掘り状に凹み、二段目掘方の深さは5～8cmである。この二段掘り部分の掘方と、棺内・棺裏込の境界ラインが概ね一致することから、二段目掘方に木棺を据えたと判断できる。このことから木棺の規模は、長軸1.8m、短軸0.4～0.5m程度に復元できる。



写真37 3号墓東辺(東から)



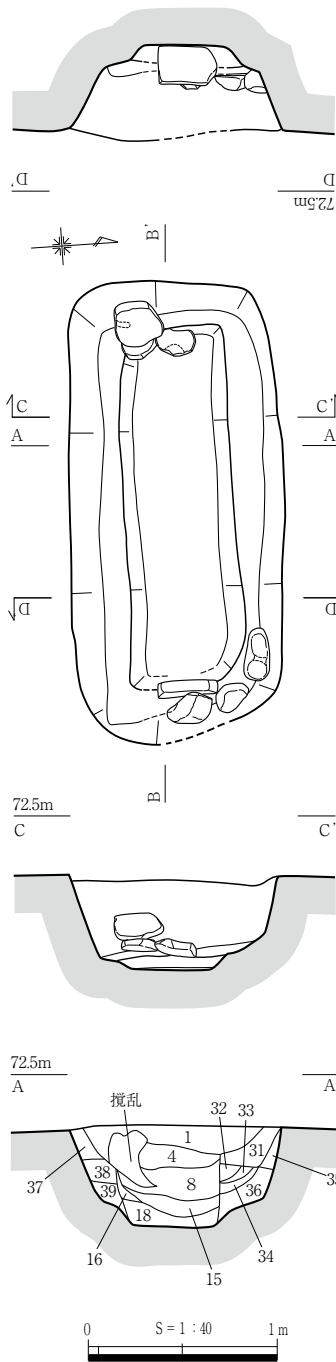
写真38 3号墓南辺(南西から)



写真39 3号墓南辺貼石転落状況(南西から)



写真40 3号墓西辺(西から)



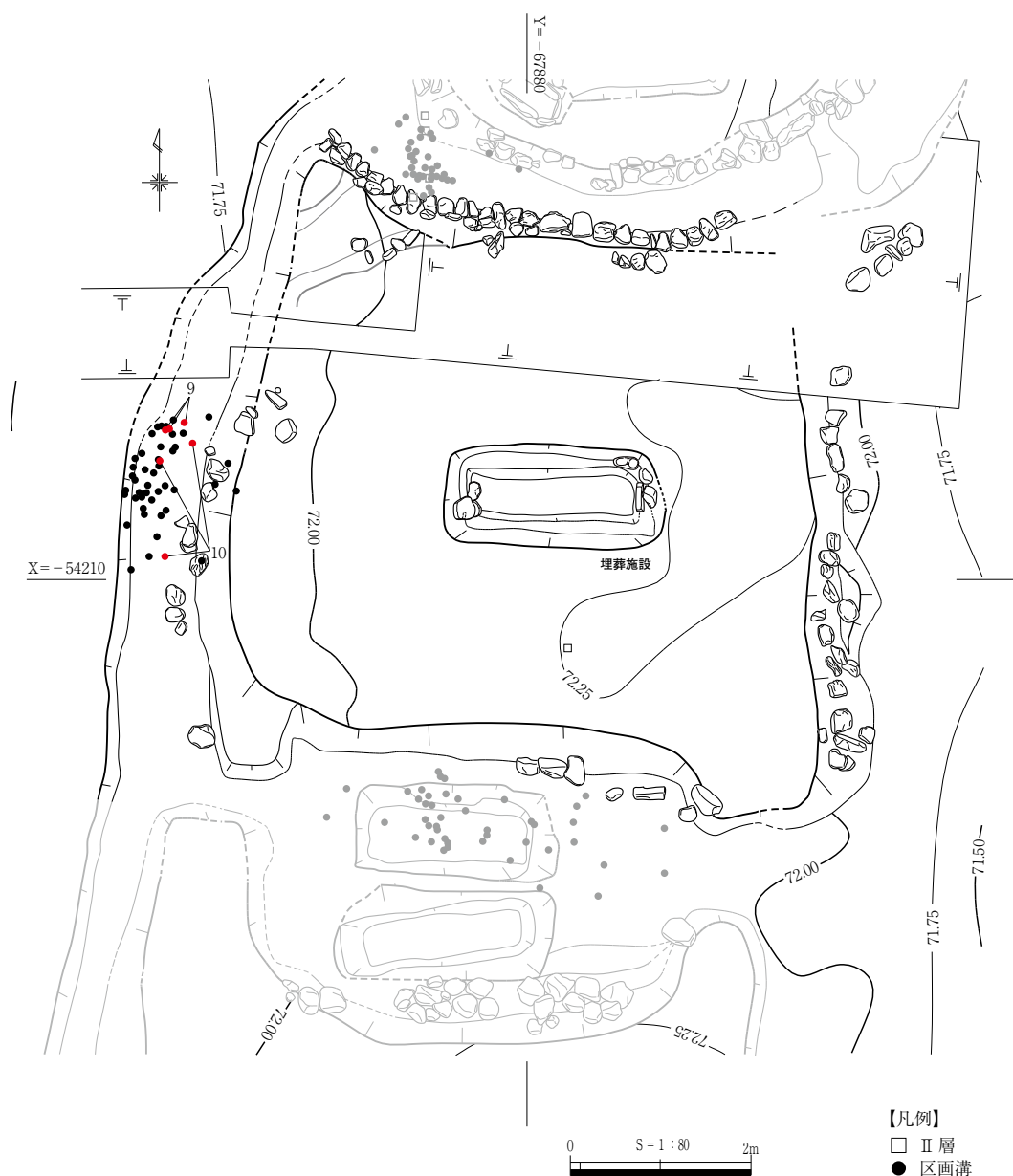
35. 黒褐色 (10YR3/2) 粘性やや弱。φ 1cm以下のⅦ層由来の砂粒混。φ 1cm以下のV層ブロック混。
36. 黒褐色 (10YR3/1) 粘性やや弱。しまりやや弱。φ 1cm以下のⅦ層由来の砂粒少混。φ 1cm以下のV層ブロック微混。
37. 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘性やや弱。しまりやや弱。φ 1cm以下のⅦ層由来の砂粒混。φ 1cm以下のV層ブロック多混。
38. 黒褐色 (10YR3/2) 粘性やや弱。しまりやや弱。φ 1cm以下のⅦ層由来の砂粒混。φ 1~3cmのⅦ層由来の未風化の火山砂少混。φ 1cm以下のV層ブロック多混。
39. におい黄褐色 (10YR4/3) 粘性やや弱。しまりやや弱。φ 1cm以下~3cmのⅦ層由来の砂粒、未風化の火山砂混。φ 1cm以下のV層ブロック混。

1. 黒褐色 (10YR3/2) φ 1cm以下~3cmのⅦ層由来の砂粒、未風化の火山砂少混。φ 1cm以下のV層ブロック混。
2. 灰黄褐色 (10YR4/2) φ 1cm以下のⅦ層由来の砂粒少混。φ 1cm以下のV層ブロック多混。
3. 黒色 (10YR2/1) しまりやや弱。φ 1cm以下~3cmのⅦ層由来の砂粒、未風化の火山砂少混。φ 1cm以下のV層ブロック混。
4. 黒褐色 (10YR3/2) φ 1cm以下のⅦ層由来の砂粒混。φ 1~3cmのⅦ層由来の未風化の火山砂少混。φ 1cm以下のV層ブロック混。
5. 黒色 (10YR2/1) 粘性やや弱。しまり弱。φ 1cm以下のⅦ層由来の砂粒少混。樹木根による攪乱を受ける。
6. 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘性弱。しまり弱。φ 1cm以下のⅦ層由来の砂粒少混。φ 1cm以下のV層ブロック多混。樹木根による攪乱を受ける。
7. 黒褐色 (10YR3/2) 粘性やや弱。しまり弱。φ 1cm以下のⅦ層由来の砂粒少混。φ 1cm以下のV層ブロック少混。
8. 黒褐色 (10YR3/2) しまりやや弱。φ 1cm以下~3cmのⅦ層由来の砂粒、未風化の火山砂少混。φ 1cm以下のV層ブロック多混。
9. 黒褐色 (10YR3/2) 粘性やや弱。φ 1cm以下~3cmのⅦ層由来の砂粒、未風化の火山砂少混。
10. 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘性やや弱。しまり弱。φ 1cm以下~3cmのⅦ層由来の砂粒、未風化の火山砂少混。φ 1cm以下のV層ブロック多混。
11. 黒褐色 (10YR3/1) φ 1cm以下のⅦ層由来の砂粒混。
12. 黒褐色 (10YR3/2) φ 1cm以下~3cmのⅦ層由来の砂粒、未風化の火山砂少混。
13. 黒褐色 (10YR3/1) φ 1cm以下~3cmのⅦ層由来の砂粒、未風化の火山砂少混。
14. 黒褐色 (10YR2/2) φ 1cm以下のⅦ層由来の砂粒少混。φ 1~3cmのⅦ層由来の未風化の火山砂混。
15. 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘性弱。しまり弱。φ 1cm以下のⅦ層由来の砂粒少混。φ 1~3cmのⅦ層由来の未風化の火山砂混。φ 1cm以下のV層ブロック非常に多混。
16. におい黄褐色 (10YR5/4) 粘性弱。しまりやや弱。φ 1cm以下のⅦ層由来の砂粒多混。φ 1cm以下のV層ブロック多混。
17. 黒褐色 (10YR3/2) φ 1cm以下のⅦ層由来の砂粒混。φ 1~3cmのⅦ層由来の未風化の火山砂混。φ 1cm以下のV層ブロック混。
18. 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘性やや弱。しまり弱。φ 1cm以下のⅦ層由来の砂粒多混。φ 1~3cmのⅦ層由来の未風化の火山砂混。φ 1cm以下のV層ブロック多混。
19. におい黄褐色 (10YR4/3) 粘性やや弱。しまりやや弱。φ 1~3cmのⅦ層由来の未風化の火山砂混。φ 1cm以下のV層ブロック多混。
20. 黒褐色 (10YR3/2) 粘性やや弱。しまりやや弱。φ 1cm以下のⅦ層由来の砂粒少混。
21. 灰黄褐色 (10YR4/2) しまりやや弱。φ 1cm以下のⅦ層由来の砂粒多混。φ 1~3cmのⅦ層由来の未風化の火山砂混。φ 1cm以下のV層ブロック非常に多混。
22. 黒褐色 (10YR3/1) φ 1cm以下のⅦ層由来の砂粒少混。φ 1cm以下のV層ブロック少混。
23. におい黄褐色 (10YR5/3) しまりやや弱。φ 1cm以下のⅦ層由来の砂粒少混。φ 1~3cmのⅦ層由来の未風化の火山砂少混。φ 1cm以下のV層ブロック非常に多混。
24. 黒褐色 (10YR3/2) 粘性やや弱。しまりやや弱。φ 1cm以下のⅦ層由来の砂粒微混。
25. 黒褐色 (10YR3/1) 粘性やや弱。しまりやや弱。φ 1cm以下のⅦ層由来の砂粒微混。
26. 黒褐色 (10YR3/2) φ 1cm以下のⅦ層由来の砂粒少混。φ 1cm以下のV層ブロック少混。
27. 黒褐色 (10YR3/2) 粘性やや弱。φ 1cm以下のⅦ層由来の砂粒少混。φ 1cm以下のV層ブロック多混。
28. 黒褐色 (10YR3/2) φ 1cm以下のⅦ層由来の砂粒少混。φ 1cm以下のV層ブロック混。
29. 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 粘性やや弱。しまり弱。φ 1cm以下~3cmのⅦ層由来の砂粒、未風化の火山砂多混。φ 1~2cmのV層ブロック混。樹木根による攪乱を受ける。
30. 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 粘性弱。しまり弱。φ 1cm以下~3cmのⅦ層由来の砂粒、未風化の火山砂多混。樹木根による攪乱を受ける。
31. 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘性やや弱。しまりやや弱。φ 1cm以下~3cmのⅦ層由来の砂粒、未風化の火山砂混。φ 1cm以下のV層ブロック多混。砂粒混。
32. におい黄褐色 (10YR4/3) 粘性やや弱。しまりやや弱。φ 1cm以下のⅦ層由来の砂粒混。φ 1~3cmのⅦ層由来の未風化の火山砂多混。φ 1cm以下のV層ブロック多混。
33. 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘性やや弱。しまりやや弱。φ 1cm以下のⅦ層由来の砂粒混。φ 1~3cmのⅦ層由来の未風化の火山砂混。φ 1cm以下のV層ブロック少混。
34. におい黄褐色 (10YR5/4) 粘性やや弱。しまりやや弱。φ 1cm以下のⅦ層由来の砂粒混。φ 1~3cmのⅦ層由来の未風化の火山砂混。φ 1cm以下のV層ブロック多混。

第36図 3号墓 埋葬施設

墓壇底面には小口穴等の掘り込みは認められず、本調査における他の木棺墓と同様、棺裏込に施したと考えられる石を検出した。石は、棺の両小口を中心に、棺材に接して板状の石を添えていたと推察できる。東側小口には、長軸0.3m程度を測る板状の河原石を横長に据え、その裏にも石を配置する。一方の西側小口では、やや小振りな長さ0.2m程度の石を横に並べて据えている。棺小口板が腐朽又は土圧により棺内へ倒壊した際、裏込めの石が棺小口板とともに棺内に流れ込んだ状況が土層堆積から窺える。

両小口において裏込めに石を配していること、墓壇及び棺の幅に明瞭な差が無いこと、墓壇底面レ



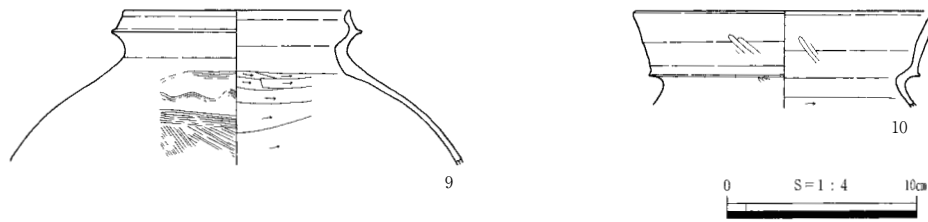
第37図 3号墓出土遺物分布図

ベルについても差が顕著でないことから、被葬者の頭位が東西どちらを採るか明確に判断できない。

(5) 出土遺物(第37・38図、PL.45)

墳頂部での出土はなく、表土(I層)、II層、区画溝埋土中から土器が出土したが、総数は少なく、細片資料が多い。区画溝中の土器は転落石に混じって出土し、原位置を保つものは無い。3号墓近辺で遺物が比較的集中する地点は、区画溝北辺・南辺・西辺である。北辺・南辺の掘方の大半は、隣り合う2号墓、4号墓の区画溝に掘り込まれており、土器はそれらの埋土から出土しているため、3号墓に明確に伴う遺物を特定するのは難しい。一方で西辺中央付近で検出した一群はその位置から3号墓に伴う可能性が高いと判断した。

第38図9・10は土師器である。9は壺で、短く内傾して立ち上がる複合口縁を呈する。10は甕で、やや外反し立ち上がる複合口縁を有し、口唇部は平坦におさめる。口縁部下端の突出は小さいがシャープである。これら土器の特徴は天神川編年に照らすとI期に該当し、古墳時代前期初頭に帰属すると考える。



第38図 3号墓出土遺物

4号墓(第39～48図、PL.46～68、写真41～54)

(1) 立地・規模・墳形

D1・2、E1・2グリッド、標高72.5mの尾根部に位置する。南北に連続して築かれる墳墓4基のうち、最も南側に立地する。区画溝を接して北側に3号墓が所在し、重複箇所における土層断面の所見から、4号墓は3号墓の後に築かれたと判断した(第45図)。一方、南側の調査地外に墳墓が存在する可能性は現況から十分に考えられるが、調査地内で明瞭な痕跡は確認されなかった。

溝に区画された墳丘の平面形は、四隅突出型を呈する。ただ、他の墳墓と同様に攪乱、流失により墳丘の遺存状況は不良で、全般に墳裾付近のみが残存する。南東隅の突出部は消失しており詳細は不明だが、遺存する突出部の平面形、規模は統一感に欠け、形状は歪であった可能性が高い。墳丘の規模は、南北軸が8.0m、東西軸7.2mを測り(突出部を含めず)、やや南北軸が長いものの概ね方形である。ただ、突出部は斜め外方を指向せず概ね南北方向へ延びるため、墳丘の平面形が「H」字に近似した形状を呈し、視覚的には南北に長い印象を受ける。

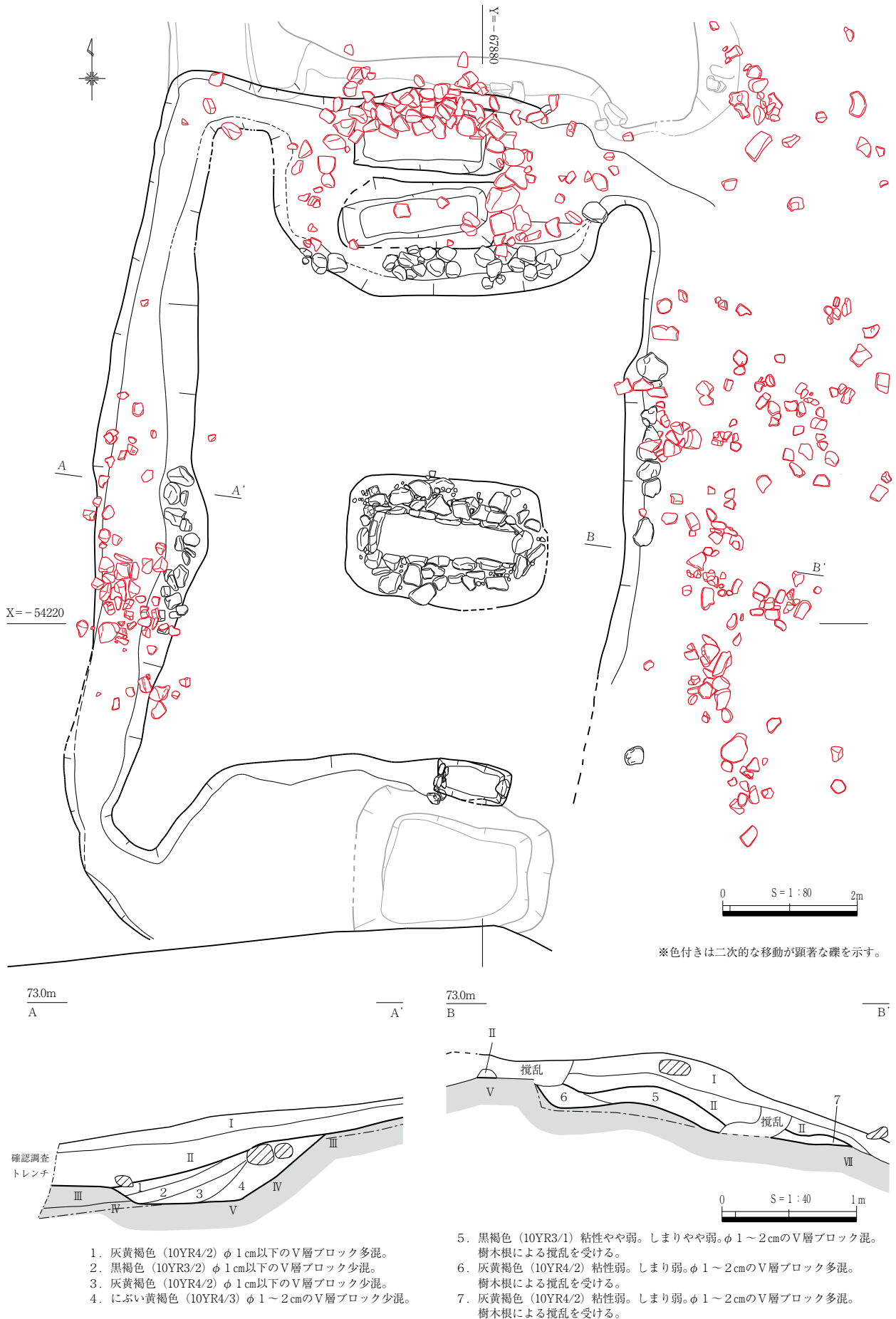
盛土は確認できず、表土(I層)、土壌化が進行した遺物包含層(II層)を掘り下げると墳丘東側を除きIII層(クロボク)が認められる。東側は樹木根による攪乱や斜面への流出が目立ち、IV層以下の基盤層が露出する。墳丘高は、最も比高差の大きい区画溝北西隅の底と墳頂との計測で0.92mである。

(2) 区画溝

全周していたとみられるが、東辺掘方の東側の肩は遺存せず、流失した可能性がある。南辺の外周線も調査地外となるため詳細は不明となる。北辺は突出部を持つ墳形に沿う形ではなく、概ね直線的に東西方向へ延びることから、区画溝外周の平面形は南北に長い長方形状を呈すると想定する。

検出面における規模について概観する。溝幅は、突出部を伴う北辺では最大で3m余りとなる。したがって、北西隅・北東隅間には比較的広い空間が生じ、そこに埋葬施設2・3が構築される。北辺は、3・4号墓基石由来の転落石が多数認められるなど、やや複雑な様相を呈するため、後に埋葬施設2・3の項で詳述する。南辺についても同様なことが想定できるが、墳裾に接して埋葬施設4を検出したほかは明確に溝内埋葬とみなしうる遺構は確認していない。当該箇所においてはSK8・9を検出したが、いずれも区画溝埋没後に営まれており(第15図F-F'セクション、第40・58図)、4号墓に伴う可能性は低いと考えている。南辺の溝幅は南西・南東隅間で2.6m以上、深さは墳裾で0.15m前後である。西辺は溝幅は0.6～1.4mと一定せず、深さは最大で0.32mだが平均では0.1～0.15m程度である。東辺は先述のように外側の肩が遺存しないため溝幅は不明で、深さは墳裾で0.2m前後となる。

遺存状況が悪いためか溝掘方の肩は全般に不明瞭である。埋土は西辺・東辺は黒褐色を主体とする。特に西辺はベースとなるクロボク(III層)と埋土の色調が類似し、峻別が困難な箇所が認められた。一方、区画溝が重複する北辺では灰黄褐色主体、南辺は褐灰色主体(第40図)と様相がやや異なる。北辺の埋土中には基盤層ブロックを多く含む層が認められ、盛土に由来する埋土である可能性がある。南



第39図 4号墓礎検出状況

辺はⅡ層に近似するものの基本層序には無い土であり、盛土に由来する可能性を残すが、墳墓群全体をとおして明確な盛土が全く認められないため、更なる検討は困難である。

溝底の標高は、西辺・東辺では南側が高く、北辺・南辺は東側が高い。各辺両端の標高差は30cm程度と傾斜は全般に緩やかで、尾根部の地形に概ね沿ったものとする。

4号墓においても溝中には多数の転落石が認められ、とりわけ北辺と東辺で顕著であった。ただ、西辺、南辺については少なく、特に南辺ではほとんど認められなかった。3号墓西辺と同様に、当初から貼石が密に設置されていなかった可能性が考えられる。

(3) 貼石

概要 原位置を概ねとどめていると判断できる貼石を確認し、第41図に示したが、全般に欠落が顕著である。貼石裏込め土の色調は灰黄褐色、にぶい黄褐色系で、基盤層由来のブロック等の混入は多くなく、溝埋土との区別が難しい箇所が認められた。以下、各辺ごとに概要を述べる。

北 辺 北西・北東隅の突出部に伴う貼石は欠落している(写真42)。本辺中央、東寄りを中心に墳裾から二段分を検出した。一段目は、長さ0.3～0.4m、幅0.2～0.3m程度の河原石を用い、横長に据える傾向が窺える。続く二段目は、長軸0.2～0.3m程とやや小サイズの石を使い、一段目上側にできた石の間隙を埋めるように設置する。これも長軸を横向きにする石がやや多い印象である。

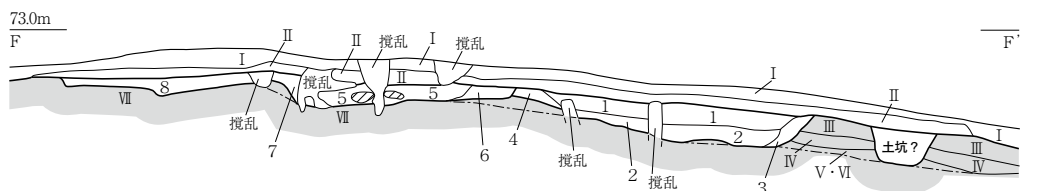
東 辺 遺存状況は不良で、中央から北寄りにかけて僅かに一段分が残る。本辺南寄りの区画溝掘方及び南東隅の突出部は消失し、土壌化と流失の著しさを示している。第39図に示したように、甲川へと至る急斜面側への転落石を多数検出しており、築造時が現状と大きく異なることは容易に窺える。



写真41 4号墓北辺(北から)



写真42 4号墓北東隅付近の貼石(俯瞰:左が北)



1. 褐灰色 (10YR4/1) φ 1cm以下のⅦ層由来の砂粒少混。φ 1cm以下のⅤ層ブロック微混。
 2. 黒褐色 (10YR3/1) φ 1cm以下のⅦ層由来の砂粒少混。φ 1cm以下のⅤ層ブロック混。
 3. 黒色 (10YR2/1) φ 1cm以下のⅦ層由来の砂粒少混。φ 1cm以下のⅤ層ブロック少混。
 4. 灰黄褐色 (10YR5/2) φ 1cm以下のⅤ層ブロック混。
 5. 黒褐色 (10YR3/1) 締りやや強。φ 1cm以下のⅦ層由来の砂粒多混。φ 1cm以下のⅤ層ブロック微混。
 6. 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘性・締りやや弱。φ 1cm以下のⅦ層由来の砂粒微混。φ 1cm以下のⅤ層ブロック混。
 7. 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘性・締りやや弱。φ 1cm以下のⅦ層由来の砂粒少混。φ 1cm以下のⅤ層ブロック多混。
 8. 灰黄褐色 (10YR4/1) 粘性・締り弱。φ 1cm以下のⅦ層由来の砂粒少混。φ 1cm以下のⅤ層ブロック混。根攪乱著しい。4号墓区画溝埋土の可能性があるが詳細不明。
- 4号墓区画溝埋土
- SK 9埋土
- 0 S = 1 : 80 2m

第40図 4号墓区画溝南辺土層断面(調査区南壁)

用いられた石の大きさは、長軸0.4m、短軸0.2m前後が多数を占めるが、長軸0.5m程度とやや大振りなものもみられる。墳丘がほとんど遺存せず、石は墳丘側に倒れているが、基本的には墳丘斜面に沿った、縦長の設置を想定でき、1～3号墓でみられた手法と特に差異は認められない。

南 辺 貼石は残存していない。墳丘が裾部しか残っていないため、貼石が全て残っていないと想定できるが、溝中の転落石など二次的な移動が想定される石の検出も皆無に近かったことから、築造時から貼石が密に設置されていなかったと考える。本辺区画溝の埋没後に構築された石囲い状の土坑SK9には、貼石と同じ石材が用いられており、本辺の貼石及び転落石を使用した可能性がある。このような後世の人為的な移動により、貼石が失われた可能性も想定できる。

西 辺 本辺中央から南寄りにかけて礫群を検出した。平成22年度確認調査Tr.6における集石が該当する。南辺と同様、二次的に移動したと判断した石を加えても貼石の全体数は少ない。溝掘方に沿って検出された一群は、貼石の遺存状況が良好な事例と比較すると、石の並びが雑然としている。また、墳裾までの設置が認められないのも特徴で、これらの検出状況から南辺と同様、貼石が密に設置されていなかった可能性がある。ただ、後世の人為的な移動も十分考えられるところであり、現状では判断が難しい。

(4) 埋葬施設

概要 4号墓で検出した埋葬施設は4基である。墳丘上に1基、残る3基は溝内に構築される。墳丘のほぼ中央に位置し、箱式石棺を納める墓壙を埋葬施設1、区画溝北辺において並列する土壙墓2基をそれぞれ埋葬施設2・3、区画溝南辺、墳丘南東隅に接して位置する小型の木棺墓を埋葬施設4と呼称する。いずれも墓壙の長軸を概ね東西方向に採る。

埋葬施設1は唯一墳丘上に位置し、特徴的な箱式石棺を納めることから中心埋葬であることは明白である。I・II層下に堆積するIII層において検出した。埋葬施設2～4は区画溝埋土掘削に伴い確認した。後に詳述するが、埋葬施設2・3は土層断面による所見から区画溝掘削とほぼ時期を同じくして構築されている。埋葬施設4は、検出が遅れたため区画溝埋土との関係など、土層堆積による検討をほとんど行えなかったが、遺存状況から埋葬施設2・3と同様に区画溝の底面付近からの掘削が想定され、現状では区画溝埋没前に築かれた可能性が高いと考えている。



写真43 4号墓東辺(東から)



写真44 4号墓東辺(俯瞰：左が北)



写真45 4号墓西辺(西から)

棺内に流入した土器片を少数確認したが、いずれの埋葬施設も棺内への副葬品は皆無であった。

埋葬施設1 (第42・43図、PL.56～61、写真46～52) 墳丘の中央やや東寄りに位置し、長軸の方位を概ね東西に採る墓壙である。Ⅱ層下において墓壙掘方を確認し、検出面における墓壙の規模は、長軸2.98m、短軸1.94m、深さは最大で0.51mである。

墓壙内には、組み合わせ式箱式石棺が納められる。石棺は、貼石と同じ甲川から搬入した河原石を未加工で用い構築されている。表土を除去した段階で石棺を構成する石材が見えはじめ、Ⅱ層を掘り下げる過程で上位の石材を概ね検出した。蓋石は無い。周辺に蓋石と想定できる石は確認できず、棺内の堆積が凹レンズ状に落ち込むことから、木蓋を想定することができる。また、棺の底面には敷石等は設置されず、墓壙底面が棺底に一致する。棺底は平坦である。



写真46 埋葬施設1 検出状況(Ⅱ層掘削中：西から)



写真47 石棺西側小口(東から)



写真48 石棺北側側石(南から)

棺は、14石を組み合わせで構成される。西小口の板石は長軸0.69m、短軸0.48m、厚さ0.18mと本調査で検出した石材のうちで最大で、横長に据えられる。一方の東小口の板石は長軸0.5m、短軸0.3m、厚さ0.16mとやや小振りで、これも長軸を横向きにして据えられている。両小口石は側石に挟まれる形態をとる。側石は長軸0.4m、短軸0.3m前後の石材を立て並べ、棺材の上端レベルから棺底までが0.3m程度になるように揃える傾向が窺える。棺材は基本的に、墓壙底面に施された溝状の掘り込みに据えられており、石材の大きさに応じて掘り込みの深さを調整している(第43図、写真51)。各石材は、形状をある程度考慮して組み合わせではいるが、間隙が生じることにについては寛容で、隙間が目立つ箇所には0.1～0.2m大の小振りな礫を少々施す程度である。棺規模は、外法で長軸2.35m、西小口幅0.97m、東小口幅0.60m、内法で長軸2.03m、西小口幅0.58m、東小口幅0.47mを測る。このように棺の小口幅から、被葬者は西頭位であったと考えられる。

棺の裏込めには基本的に石、土、砂を用いているが、北側と南側で様相が異なる。棺の南側長辺を境界とし、以北の墓壙掘方は現状で0.3m程度とやや深く掘削される。北側側石裏には、板状の石材を棺側石に対し長手積み様に概ね向きを揃え2、3段積む(第43図)。小口石裏は河原石を縦長に差し込むように設置し、それぞれ生じた間隙には礫石を入れる。北側で特徴的なのは、石積み、礫石と共に砂を使用することである。砂は灰白色

を呈する粗砂で、甲川の河原で採取できる川砂と考えられ、棺の石材と共に白色を強調した外観上の演出である可能性がある。北側側石裏の石積みは、側石上端よりやや上まで施され、そこで高さを概ね揃える。

一方の南側側石裏は、北側と同様に棺材上端よりやや上まで板石を平置きにするが、その板石を外すと以下は専ら基盤層ブロックを含んだ土が充填され、石積みや礫石、川砂は用いられない。また、深さも現状で0.16m程と北側のほぼ半分で、手法の簡略化が明瞭である(写真51)。

現状では配置が若干乱れているが、石積み等により、棺上端よりもやや上で高さを揃え、そこに木蓋を設置した蓋然性が高い。西小口石より小振りな東小口石上にも、根攪乱により若干移動するが板状石材を据える。この想定を採用した場合、棺の深さは0.35～0.40m程度に復元できる。

棺内の堆積は、木製の棺蓋の腐朽により墓壇埋土が流入した状況を看取できる。木棺痕跡は窺えず、槨構造には該当しないと判断した。棺内流入土の上層で、小礫を多量に含む堆積が認められた。第42図の1・5～7層が該当し、棺内東側に集中する(第42図の網掛け部分、写真52)。小礫は5、6cm大の亜円礫で、河原からの搬入が窺える。棺を蓋った後、被葬者の下半身側を中心に礫石を集積した状況を想定することができる。

棺内外に副葬品は皆無であった。棺内埋土中に土器片を少数含むが、流入と考えられる。

埋葬施設2・3(第44・45図、PL.62～64、写真53・54) 概要で触れたとおり、区画溝北辺のほぼ中央に、2基の墓壇が南北に並列して検出された。やや軸を違えるが、両墓壇共に概ね長軸を東西方向に採る。墳丘寄りの南側に位置する墓壇を埋葬施設2、北側の墓壇を埋葬施設3とする。

両埋葬施設は3号墓、4号墓区画溝の重複箇所に位置する。両区画溝の先後関係の検討に加え、当初は別遺構の存在を考慮し、調査はやや複雑な経緯を辿った。結果的に、両埋葬施設は4号墓に



写真49 石棺東側小口(西から)



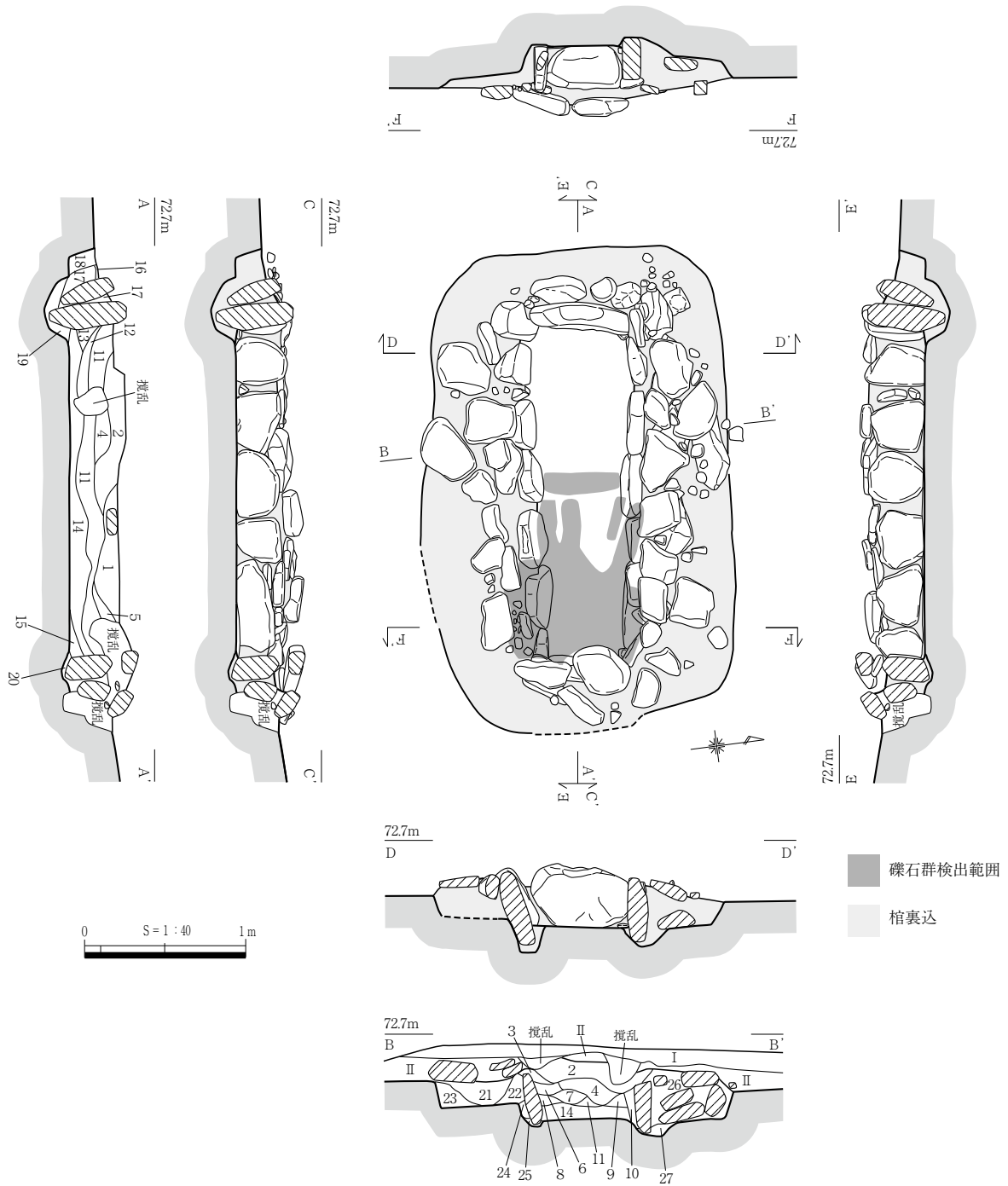
写真50 石棺南側側石(北西から)



写真51 棺材、裏込除去後状況(東から)



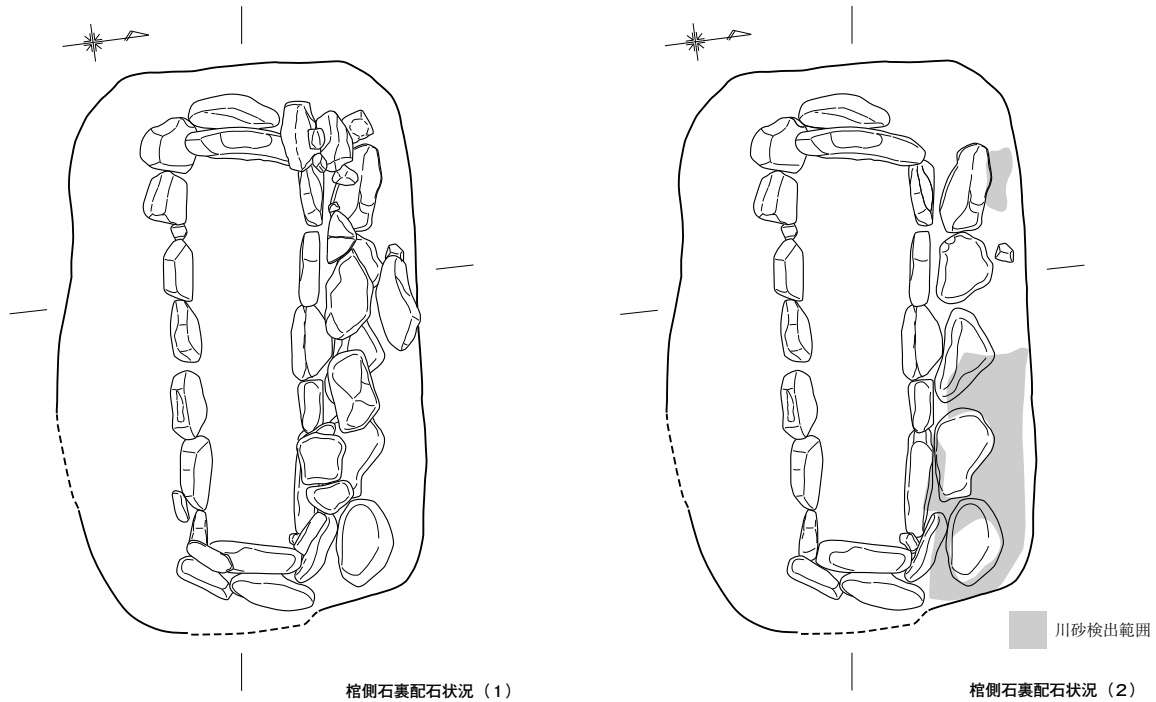
写真52 埋葬施設1上層礫石検出状況(東から)



(棺内)

1. 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘性やや弱。しまりやや弱。φ 1 cm以下のⅦ層由来の砂粒多混。φ 2~5 cm程度の亜円礫多混。
2. 黒褐色 (10YR3/2) φ 1 cm以下のⅦ層由来の砂粒少混。φ 1 cm以下のⅤ層ブロック少混。
3. にぶい黄褐色 (10YR5/3) φ 1 cm以下のⅦ層由来の砂粒少混。φ 1 cm以下のⅤ層ブロック混。φ 2~5 cm程度の亜円礫少混。
4. 黒褐色 (10YR3/4) しまりやや弱。φ 1 cm以下のⅦ層由来の砂粒少混。φ 1 cm以下のⅤ層ブロック多混。
5. にぶい黄褐色 (10YR4/3) しまりやや弱。φ 1 cm以下のⅦ層由来の砂粒少混。φ 1 cm以下のⅤ層ブロック多混。φ 2~5 cm程度の亜円礫非常に多混。
6. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘性やや弱。φ 1 cm以下のⅦ層由来の砂粒少混。φ 1 cm以下のⅤ層ブロック混。φ 2~5 cm程度の亜円礫少混。
7. 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘性やや弱。しまりやや弱。φ 1 cm以下のⅦ層由来の砂粒混。φ 1 cm以下のⅤ層ブロック多混。φ 2~5 cm程度の亜円礫多混。
8. 黒褐色 (10YR3/2) 粘性やや弱。φ 1 cm以下のⅦ層由来の砂粒少混。φ 1 cm以下のⅤ層ブロック少混。
9. 灰黄褐色 (10YR4/2) φ 1 cm以下のⅦ層由来の砂粒少混。φ 1 cm以下のⅤ層ブロック少混。φ 2~5 cm程度の亜円礫少混。
10. にぶい黄褐色 (10YR5/3) φ 1 cm以下のⅦ層由来の砂粒少混。φ 1 cm以下のⅤ層ブロック少混。
11. 黒褐色 (10YR3/2) φ 1 cm以下のⅦ層由来の砂粒微混。φ 1 cm以下のⅤ層ブロック多混。
12. 黒色 (10YR2/1) φ 1 cm以下のⅦ層由来の砂粒混。φ 1 cm以下のⅤ層ブロック少混。
13. 黒褐色 (10YR3/1) φ 1 cm以下のⅦ層由来の砂粒少混。φ 1 cm以下のⅤ層ブロック少混。
14. 褐色 (10YR4/4) φ 1 cm以下のⅦ層由来の砂粒少混。φ 1 cm以下のⅤ層ブロック多混。φ 2~5 cm程度の亜円礫少混。
15. にぶい黄褐色 (10YR4/3) φ 1 cm以下のⅦ層由来の砂粒少混。φ 1 cm以下のⅤ層ブロック混。

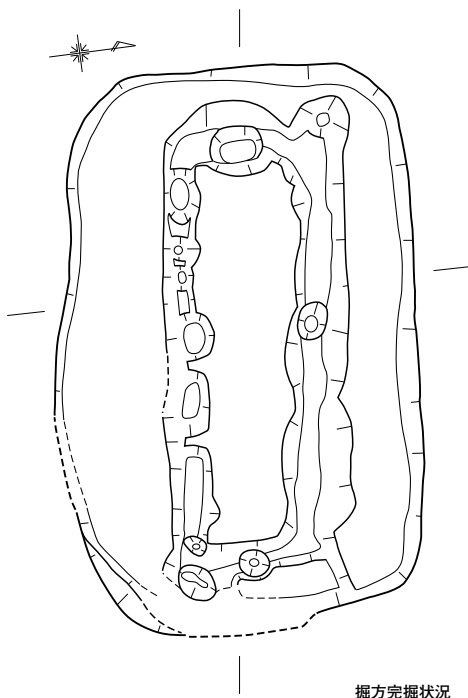
第42図 4号墓 埋葬施設1(1)



棺側石裏配石状況 (1)

棺側石裏配石状況 (2)

0 S=1:40 1m



掘方完掘状況

(棺外)

16. 灰白色砂 (10YR8/1) 粘性弱。しまり弱。川砂を主体とする。
φ 1 cm以下の灰黄褐色土ブロック (10YR4/2) 混。φ 1~5 cm程度の亜円礫多混。
17. 灰黄褐色 (10YR4/2) φ 1 cm以下のV層ブロック少混。川砂 (10YR8/1) 少混。
18. 黒褐色 (10YR3/1) φ 1 cm以下のV層ブロック微混。川砂 (10YR8/1) 微混。
19. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘性やや弱。しまりやや弱。
φ 1 cm以下のVII層由来の砂粒少混。φ 1 cm以下のV層ブロック少混。
20. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘性やや弱。しまりやや弱。
φ 1 cm以下のVII層由来の砂粒微混。φ 1 cm以下のV層ブロック少混。
21. にぶい黄褐色 (10YR4/3) φ 1 cm以下~5 cmのVII層由来の砂粒、未風化の火山砂少混。
φ 1 cm以下のV層ブロック多混。川砂 (10YR8/1) 少混。φ 1~5 cm程度の亜円礫多混。
22. 灰黄褐色 (10YR4/2) φ 1 cm以下~5 cmのVII層由来の砂粒、未風化の火山砂少混。
φ 1 cm以下のV層ブロック混。川砂 (10YR8/1) 微混。φ 1~5 cm程度の亜円礫微混。
23. 黒褐色 (10YR3/2) φ 1 cm以下~5 cmのVII層由来の砂粒、未風化の火山砂微混。
φ 1 cm以下のV層ブロック微混。
24. 灰黄褐色 (10YR4/3) φ 1 cm以下~5 cmのVII層由来の砂粒、未風化の火山砂微混。
φ 1 cm以下のV層ブロック微混。
25. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘性やや弱。しまりやや弱。
φ 1 cm以下~5 cmのVII層由来の砂粒、火山砂少混。φ 1 cm以下のV層ブロック微混。
26. 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘性弱。しまり弱。φ 1~5 cmのVII層由来の未風化の火山砂少混。
φ 1 cm以下のV層ブロック少混。川砂 (10YR8/1) 非常に多混。
φ 1~5 cm程度の亜円礫非常に多混。
27. 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘性やや弱。しまりやや弱。φ 1 cm以下~5 cmのVII層由来の砂粒、未風化の火山砂少混。φ 1 cm以下のV層ブロック微混。

第43図 4号墓 埋葬施設1 (2)

伴うと判断した。結論に至る検討過程は区画溝の項で記載すべき内容も含むが、両埋葬施設を含めた形で精査、検討を進めた経緯があり、本項でまとめて記載することとした。

当該箇所は、結論から述べれば3・4号墓の突出部が相対することにより生じる平面長方形の空間であった(写真53)。ただ、当初は4号墓の墳形を四隅突出型と認識していなかったため、礫が間隙を有しながらも概ね長方形に巡ることから、墳丘南側にあるSK9に類する配石遺構の可能性を想定した。検出後、掘り下げを平面的に進めると夥しい数の石が検出され、礫群が帯状に延び、平面的に方



写真53 3・4号墓重複箇所
Ⅱ層下検出状況(西から)



写真54 3・4号墓重複箇所礫検出状況(北西から)

形に巡る様子が窺えた(第44図、写真54)。更に掘り下げ、詳細を確認した結果、礫群は雑然とした分布を示し明確な石組を構成せず、落ち込みの深さも全般に0.1～0.3m程度と浅く、土層断面からも礫群に伴う明確な掘方は確認できなかった。その後、区画溝の調査が進み、4号墓が突出部を持つことが判明し、それを踏まえた土層堆積の再検討により、4号墓の区画溝掘方が3号墓区画溝のほとんどを掘り込むことが分かり(第41・45図)、方形に巡るように見えた礫群は両墳墓から転落した貼石の可能性が高いと判断した。つまり、4号墓北辺において貼石が原位置を一部とどめるものの、それ以外は突出部を中心に大半が欠落しており、4号墓区画溝の埋没に伴って、3・4号墓の貼石が転落したという判断である。礫群の分布が、突出部と概ね相似形を呈することもそのことを示唆すると考える。特に、3号墓南辺に沿って石が折り重なる箇所は、貼石の遺存状況と併せて勘案すれば3号墓南辺の貼石が転落したものと判断できる。なお、これら礫群と埋葬施設2・3は平面的な位置が概ね重なることから(第44図)、当初は関連を考えたが、上述の土層堆積状況の所見により、両埋葬施設は4号墓区画溝の埋没前に構築された可能性が高く、礫群との関係性は無いと判断した。

両墓壙は区画溝底面から掘り込まれる。埋葬施設2の掘方は、墳端に接する。墓壙の規模は、埋葬施設2が長軸2.45m、短軸1.05m、深さ0.46m、埋葬施設3が長軸2.24m、短軸1.05m、深さ0.34mである。

いずれも墓壙内の土層堆積からは、木棺の痕跡は窺えない。また、墓壙中に裏込の石を持たないことも併せると、土壙墓の可能性が高い。なお、第45図記載の埋葬施設3の13層は、墓壙中央でやや盛り上がる。このことから、埋葬施設2上層の3層は区画溝埋土としたが、墓壙埋土の可能性もある。墓壙埋土は原則として基盤層ブロックを多く含む。両墓壙は僅かであるが掘方が重複する箇所があり(第45図D-D'セクション)、埋葬施設2掘方が埋葬施設3掘方を切る。ただ、配置や土層堆積から大きな時間差があるとは考え難い。

墓壙の平面形や底面レベルから特に所見は見出せず、被葬者の埋葬頭位については不明である。
埋葬施設4(第46図、PL.64・65) 区画溝南辺の埋土掘削中に確認した。突出部が遺存しないため推定だが、南東隅突出部における内角の墳裾に構築されたと考える。長軸を東西方向に採る小型の墓壙で、図では墳丘斜面に掘り込まれているように見えるが、当該箇所では墳丘はほとんど消失しており